

X. 川津六反地遺跡

1. 立地と環境

川津六反地遺跡は、大東川によって形成された沖積平野が、東から西にむかって非常に緩やかに傾斜する地形上に立地する。周辺では下川津遺跡、川津一ノ又遺跡・川津川西遺跡などが瀬戸大橋建設や四国横断自動車道建設に伴い調査されている。また条里型地割の痕跡も明確に残っており、当センターが実施した平成9・10年度の川津六反地遺跡の調査においても、地割に沿う溝状遺構が数多く確認されている。



第42図 遺跡の位置図 (1/50,000)

2. 調査の成果

本遺跡の遺構面は浅く、耕作土直下において検出することができる。平成9年度に西側で行われた調査によって確認された基盤土(黄灰色粘質土)の上位に堆積する灰褐色粘質土の上面に相当する。また下層確認を行ったところ、調査区の東方で灰色砂質土や黒色粘質土が繰り返し堆積した、深さ2mを超える自然河川跡を確認することができた。したがって調査区の東半分は基盤土が削られているようである。

調査区を調査の便宜上から、北側の調査区をI区、南側の調査区をII区と分割した。検出した遺構は、中世以降の掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑と、弥生時代の溝状遺構である。以下、調査区ごとに調査概要について述べる。

(1) I区

SD02 調査区のほぼ全体を占める東西に流れる溝状遺構であり、埋土は灰色粘質土である。幅は南岸が調査区外になるが、確認した部分で約6mあることから、全体では約8mになると考えられる。平成10年度の調査で、これとほぼ平行する溝状遺構の南岸を検出しており、埋土もほぼ同一である。しかしながら同一の遺構と仮定すると幅が約12mを超えることから、別の遺構の可能性についても検討する必要があると考えられる。確認している部分だけでも、これまでの調査で確認されている溝状遺構と規模が大きく異なることから、基幹水路としての性格をもつ遺構と考えられる。遺物は14世紀の土師器の土釜が出土している。

(2) II区

① 弥生時代

SD21 幅約8m、深さ約1.4mを測り、ほぼ真南から真北に流れる。埋土は黒色粘質土である。大部分がSD14に削られているために、わずかに遺構の下位の部分を検出したにとどまった。底部に約10cmの砂質土の堆積があり、同土層序中から弥生時代中期を中心とする弥生土器やサヌカイト製の石器等が出土した。また南壁面に近い位置から約1.6mの木材と石斧が出土した。

② 中世

SD02 埋土は灰色粘質土である。規模は幅約1.9m、深さ約0.7mを測る。遺物の出土量は、他の溝状遺構を圧倒しており、13世紀後半の亀山焼のこね鉢、14世紀の坏・椀・皿・土釜等の土師器、椀・皿等の瓦器と多様である。また、白・青磁等も出土している。

S D05・06・07 幅約2.3m, 深さ約0.4mを測る。S D02と平行に流れ, 遺物も14世紀の土師器の皿や
 坏, 土釜等比較的似た時期のものを出土している。しかしながら, 埋土が灰色砂質土であり, 遺物の量
 もS D02と比べるとときわめて少ないことから, S D02と性格が異なるものと考えられる。S D02, 05・
 06・07ともに坪界に平行して流れており, 調査区東側に想定される坪界と, 平成9年度の調査区で想定
 した坪界のほぼ中央部に位置している。

3. まとめ

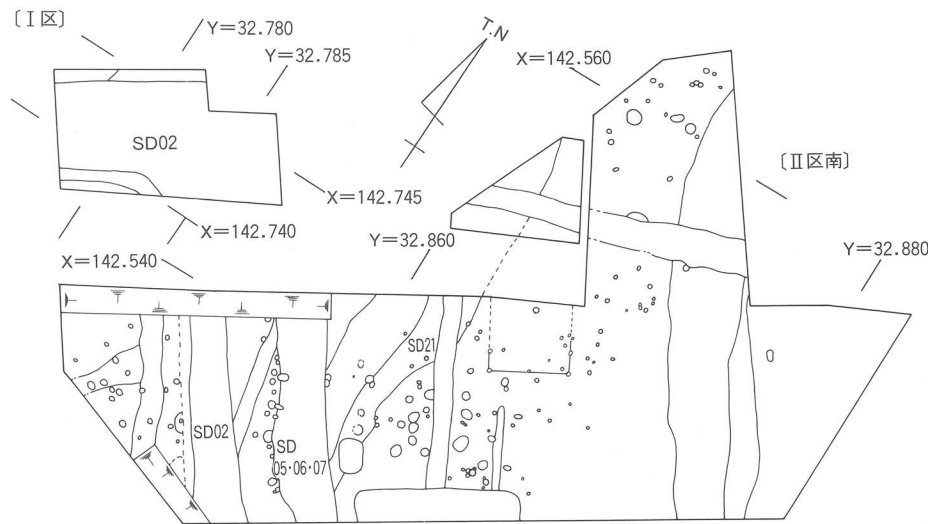
今年度の川津六反地遺跡の調査においては, 弥生時代の溝状遺構, 中世の坪界と考えられる溝状遺構
 等を検出した。中世の溝状遺構においては, 現存する地割と平行する溝状遺構を数多く検出し, 今後条
 里型地割を考える際において, 貴重な一資料になり得るものと考えられる。特にI区のS D02において
 は, 今までに検出した溝状遺構とは規模が大きく違うことから, 川津六反地遺跡の土地区画の変遷を考
 える上において新たな資料を提示したと言える。



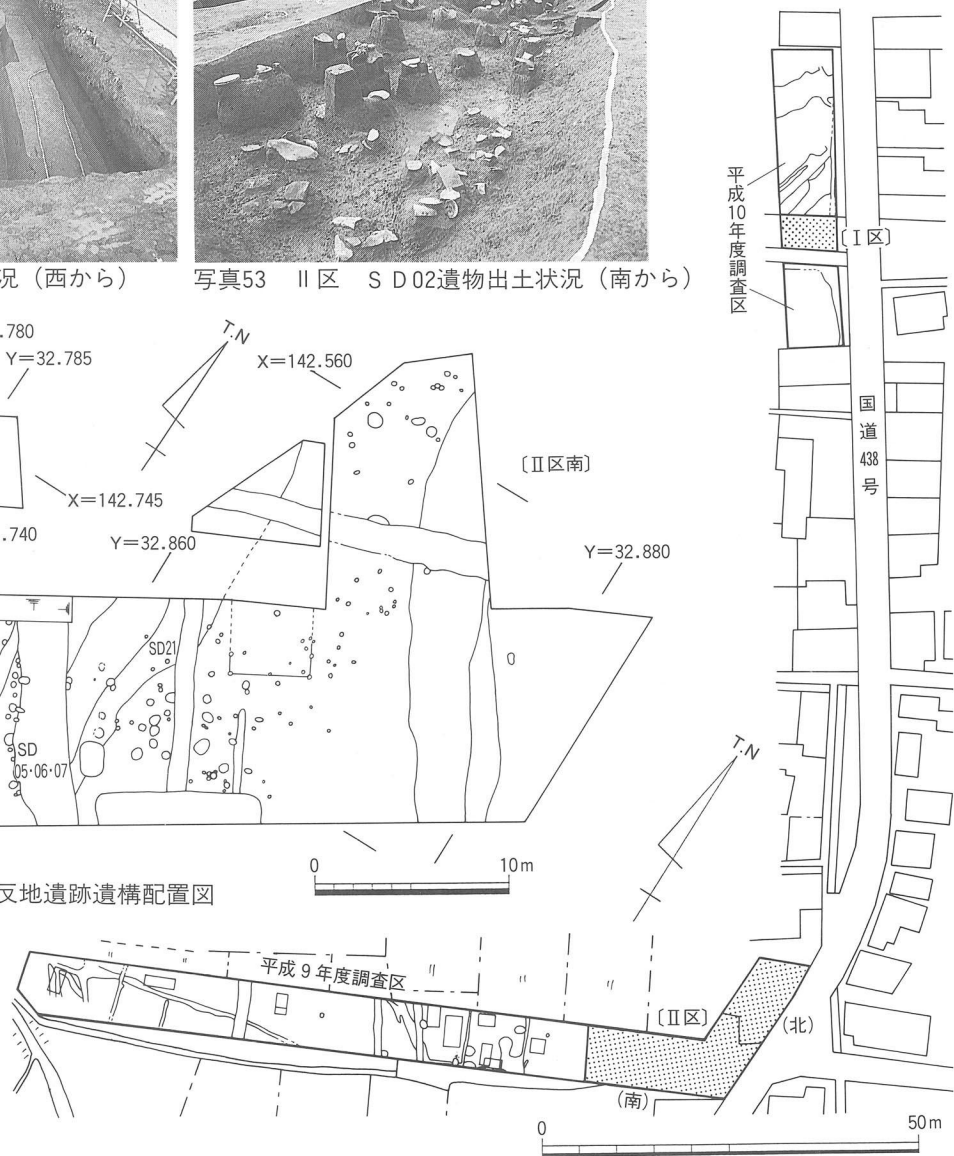
写真52 I区 完掘状況 (西から)



写真53 II区 S D02遺物出土状況 (南から)



第43図 川津六反地遺跡遺構配置図

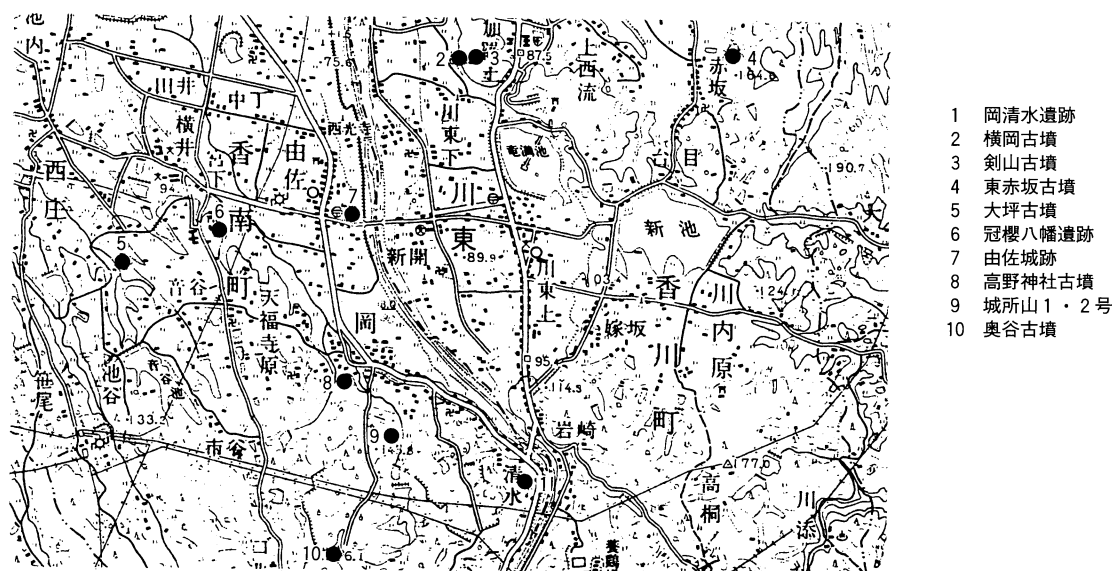


第44図 川津六反地遺跡調査区割図

XI. 岡清水遺跡

1. 立地と環境

岡清水遺跡は、高松平野に広がる扇状地の扇頂部に位置しており、北西方向に広く高松平野を望むことができる。香東川の西に広がる河岸段丘上にあり、基盤土は黄褐色砂質土からなるが、その下層には、数メートルを超えるような大きな石を多く含む洪水砂で埋め尽くされており、幾度となく続いた氾濫の様子を伺うことができる。標高はおよそ105mほどであり、西の斜面からの崩れてきた土砂により、西から東に傾斜している。周辺の遺跡としては、中世の城跡として由佐城跡がある。また、古墳時代の遺跡として奥谷古墳や高野神社古墳等があるが、それ以前に遡る遺跡は確認されていない。



第45図 遺跡の位置及び周辺の遺跡 (1/50,000)

2. 調査の成果

当遺跡の立地場所は香東川の河岸段丘上であり、西から東にはやや急に、南から北にかけては緩やかに傾斜している。黄褐色細砂の基盤土の上に、西方の山から崩れてきた暗褐色から黄褐色にかけての砂質土と香東川の氾濫による暗褐色の粘質土が堆積している。調査区を調査の便宜上から、北からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と分割した。遺構面は2面あり、第1遺構面では、中世以降の掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑等を、第2遺構面では弥生時代の竪穴住居跡・土器棺墓・井戸跡等を確認した。以下、時代ごとに調査概要について述べる。

(1) 弥生時代

① 竪穴住居跡〔第2表〕

壁の土層で確認できた遺構を合わせ、15棟を確認したが、今後の整理を進めることにより、Ⅲ-③を中心としてまだ数棟増えるものと思われる。以下主なものについて述べていく。(カッコ内は調査時の遺構名) SH02 (Ⅱ区-④) : SH01〔写真54〕 調査区東部で検出した。多数のピットや土坑を検出したが、床面を覆う黄褐色土が土坑をふさいでいることから、2つの竪穴住居跡が重複しているか、もしくは1棟の竪穴住居跡を拡張した可能性が考えられる。壁溝が巡るが、一部は壁面から離れている。

S H06～10 (Ⅲ区—①) : S H01～05)〔写真55〕 試掘トレンチの土層によりS H01～05の断面を確認したが、S H04・05については埋土のグライ化が激しいために、遺構面において明確に検出できておらず、先後関係も定かでない。

S H11 (Ⅲ区—③) : S H01)〔写真56〕 自然河川跡により削平を受けており、西ほど依存状態がよかった。壁溝が二重に巡っており、支柱穴跡の構成も2とおりに考えられることから、床面の拡張を行ったものと考えられる。なお西部に方形の土坑があるが、後世のものと考えられる。

S H14 (Ⅲ区—③) : S H04)〔写真57〕 深さ50cmを測るが、北部は削平を受けており、数センチと依存状態が悪かった。北側に張り出し部をもっており、南半分にはベッド状遺構も確認した。また床面の数カ所に焼土が残っており、炉跡も2基確認した。支柱穴跡の構成が、北半分を重ねて2とおりに考えられることから、北半分の支柱穴を共有し、新たに南に柱穴を設け拡張した可能性が考えられる。

遺構名	調査時の遺構名		平面 形態	規模(cm)			特記事項	時期
	調査区	遺構名		長径	短径	深さ		
SH01	I-④	SH01	不明	240	15		東壁土層で確認。炉跡を確認。	不明
SH02	II-④	SH01	円形	500	—	30	東壁土層で炉跡を確認。拡張の可能性あり。壁溝が巡る。	後期前半
SH03	II-④	SH02	円形	1200	—	35	壁溝が巡る。	後期末
SH04	II-④	SH03	不明	400		20	東壁土層で確認。	不明
SH05	II-④	SH04	不明	950		20	東壁土層で確認。	不明
SH06	III-①	SH01	円形	760	600	25	床面が東に傾く。支柱穴跡7基。壁溝が一部巡る。	中期後半
SH07	III-①	SH02	円形	600	520	20	床面が東に傾く。床面に壺形土器・たき石等が出土。	中期末～後期前半
SH08	III-①	SH03	円形	900	900	20	床面が東に傾く。	中期後半
SH09	III-①	SH04	方形	—		30	トレンチの土層で確認。	後期前半
SH10	III-①	SH05	円形	750	600	20	壁溝が一部巡る。	中期末～後期前半
SH11	III-③	SH01	円形	780	620	60	壁溝が二重に巡る。壁溝より鉢が出土。支柱穴跡10基。炉跡。拡張の可能性あり。	後期前半
SH12	III-③	SH02	円形	360	270	40	新しい竪穴住居跡と重複している可能性あり。	不明
SH13	III-③	SH03	円形	500	460	3	炉跡。	後期後半
SH14	III-③	SH04	円形	800	690	50	壁溝が巡る。支柱穴跡9基。炉跡2基。ベッド状遺構。張り出し部。	後期後半
SH15	III-③	SH05	円形	—			壁溝が一部巡る。	不明

第2表 竪穴住居跡一覧表

注: 斜体は推定値

②土器棺墓〔第3表, 第46・47図, 写真58・59〕

2基を確認したが、S T02は下半分しか検出することができなかった。ともに棺に壺形土器を、蓋に口頸部を打ち欠いた壺形土器を用いている。

遺構名	調査時の遺構名		主軸方向	規模(cm)			特記事項	時期
	調査区	遺構名		長径	短径	深さ		
ST01	II-④	ST01	西	95	80	80	棺に大型の壺形土器を、蓋には壺形土器の口頸部を打ち欠いた土器を使用している。	後期後半
ST02	III-②	ST01	—	100	95	65	棺に大型の壺形土器を、蓋には壺形土器の口頸部を打ち欠いた土器を使用している。打ち欠いた口頸部も一緒に埋められていた。	後期

第3表 土器棺墓一覧表

(2) 中世以降の遺構

① 炭化材を多く含む土坑〔第4表〕

全調査区において炭化材を含む土坑が多く確認されており、一部が残っているものを合わせると9基



写真54 SH02完掘状況（東から）



写真55 SH06~10完掘状況（西から）

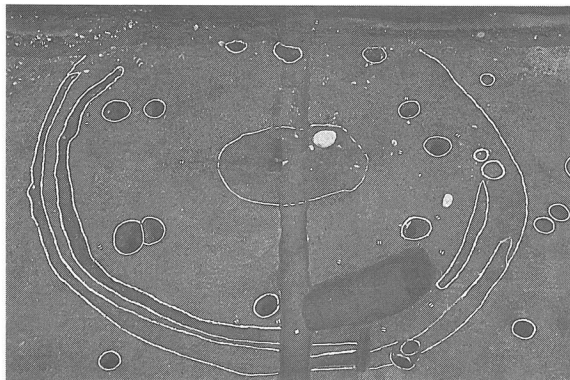


写真56 SH11完掘状況（西から）

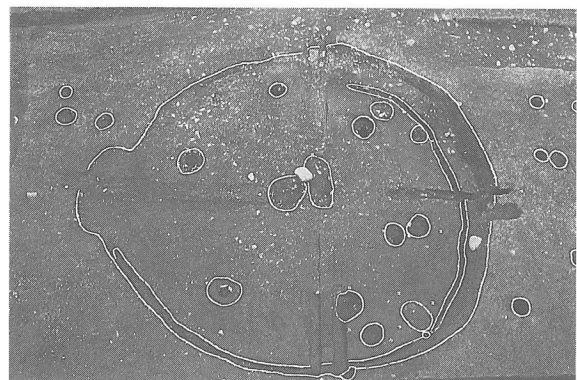
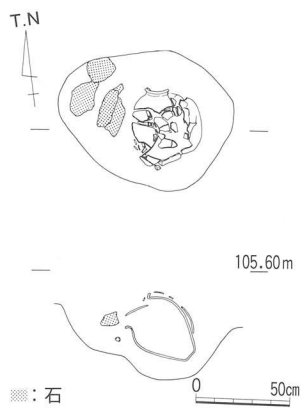
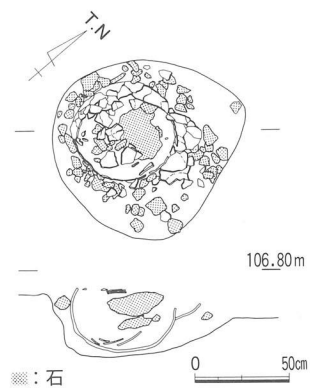


写真57 SH14完掘状況（西から）



第46図 ST01平・断面図（1/40）



第47図 ST02平・断面図（1/40）

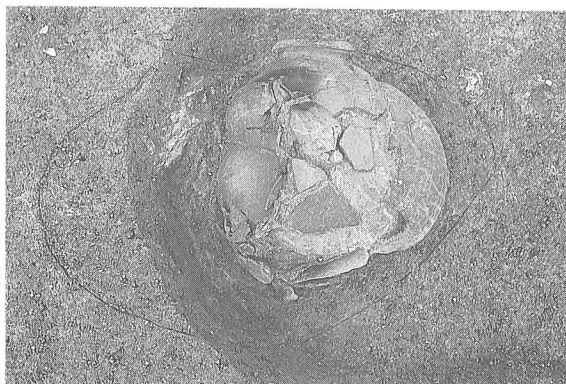


写真58 ST01検出状況（南から）

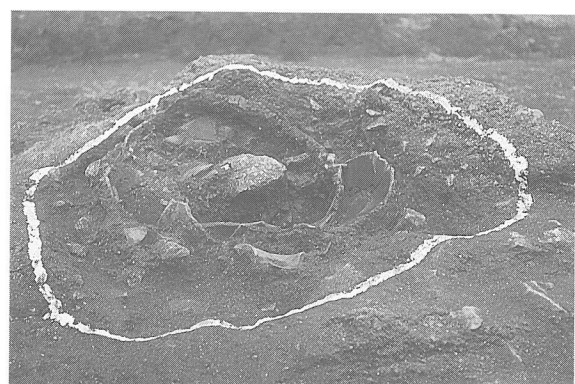
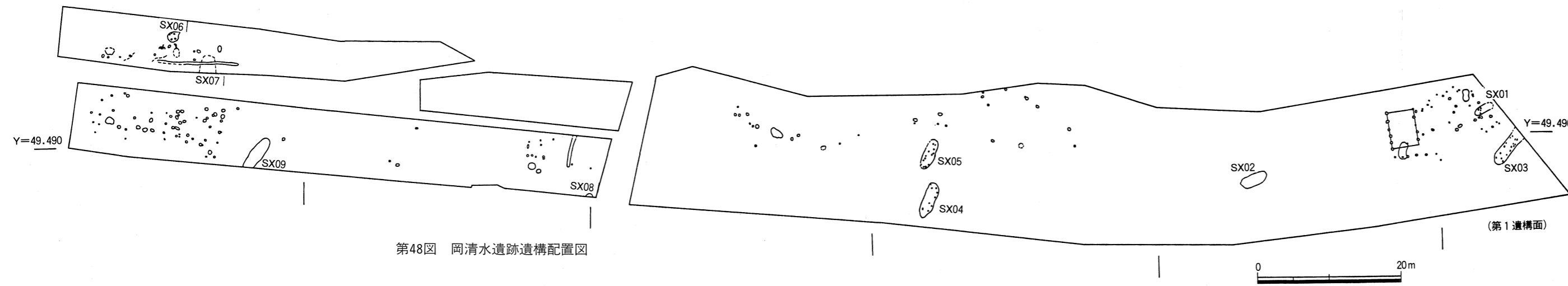
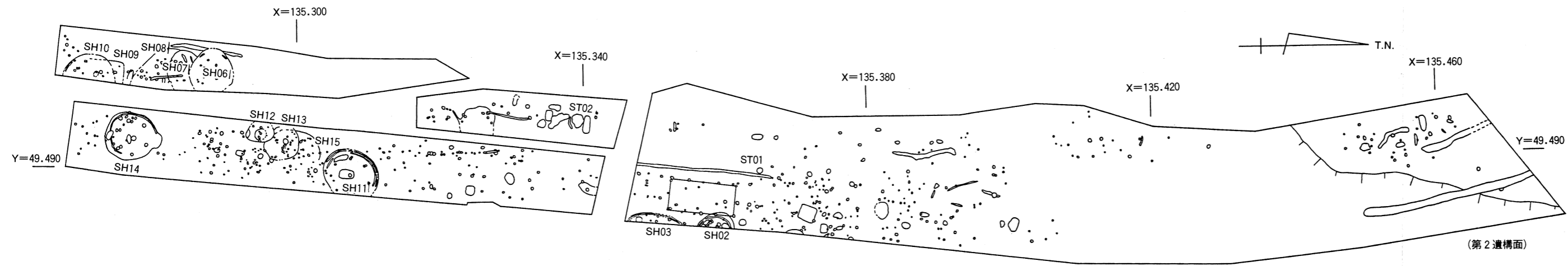
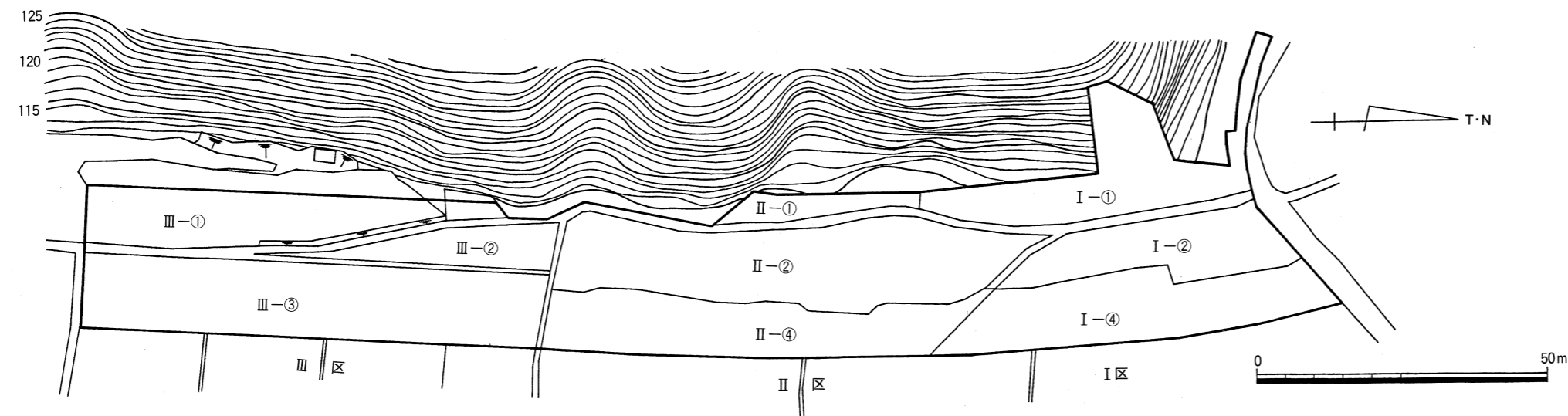


写真59 ST02検出状況（南から）



第48図 岡清水遺跡遺構配置図



第49図 岡清水遺跡調査区割図

にのぼる。おおむね長楕円形で中には炭化材が多量に含まれており、木材の原形を残しているものも認められる。また遺構によっては意図的に並べて焼かれた形跡をもつものもある。床面は非常に硬く焼けてしまっており、一部赤く変色している部分もある。また遺構の内には壁面に沿って直径2～3cmのピットが十数基並んでいる。巻き上げの可能性のあるものを除けば、遺物は全く含んでいない。穴を掘り薪を床に並べ、数本の木で柱を作り、むしろなどをかぶせて焼く炭焼き窯などの可能性も考えられるが、検討の余地を残している。

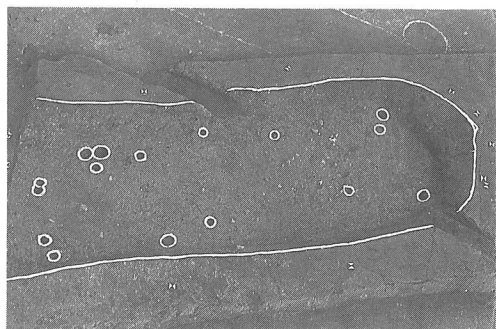
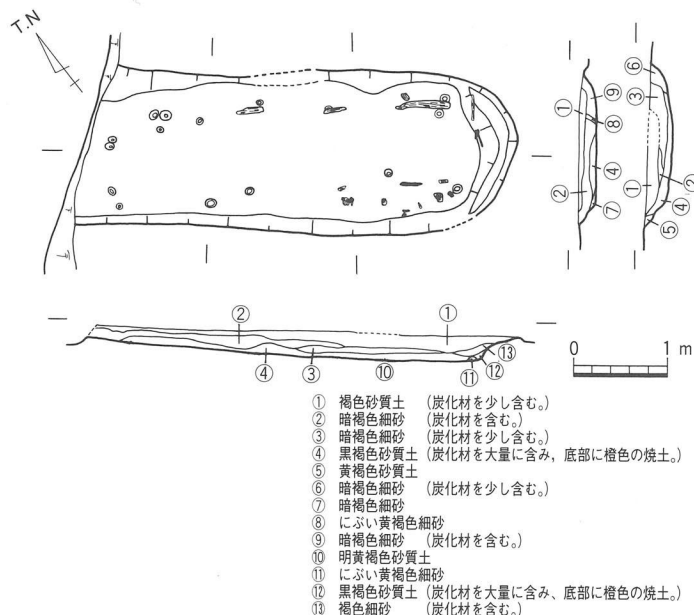


写真60 SX03完掘状況(西から)



第50図 SX03平・断面図(1/80)

3. まとめ

現香東川中・下流域においては上天神遺跡、多肥宮尻遺跡等の多くの弥生時代中期から後期の遺跡が確認されているが、今回の調査により、現香東川上流、高松平野を形成する扇状地の扇頂部分にも集落域があったことを明らかにすることができた。

また包含層の中からではあるが、結晶片岩製の石庖丁が数点出土している。結晶片岩の産出地である徳島県との交易ルートを考えてみるとその一つに香東川流域が考えられ、そのルートをとると当遺跡はさけて通れない位置にある。つまり今後調査成果を整理することにより、讃岐山脈を越えての交流を考える上において貴重な資料になり得ると考えられる。

遺構名	調査時の遺構名		検出状況	規模(cm)			特記事項
	調査区	遺構名		長径	短径	深さ	
SX01	I-②	SX01	一部削平	370	220	30	直径数cmのピットを検出。北側が調査区外へ。
SX02	I-④	SX08	完形	360	150	10	直径数cmのピットを検出。主軸にあわせて炭化材を検出。
SX03	I-④	SX09	一部削平	460	170	30	直径数cmのピットを検出。
SX04	II-④	SX01	完形	450	150	20	直径数cmのピットを検出。他に比べ傾斜がきつい。SX02とほぼ同軸。
SX05	II-④	SX02	ほぼ完形	510	165	25	直径数cmのピットを検出。SX01とほぼ同軸。わずかに南東部削平。
SX06	III-①	SX01	一部残存	200	120	10	直径数cmのピットを検出。底部の一部と考えられる。
SX07	III-①	SX02	一部残存	210	120	40	胴部のみ検出。
SX08	III-④	SX01	ほぼ完形	500	180	40	直径数cmのピットを検出。主軸にあわせて炭化材を検出。東部が調査区外へ。
SX09	III-④	SX02	一部残存	170	110	50	直径数cmのピットを検出。北・東側が調査区外へ。

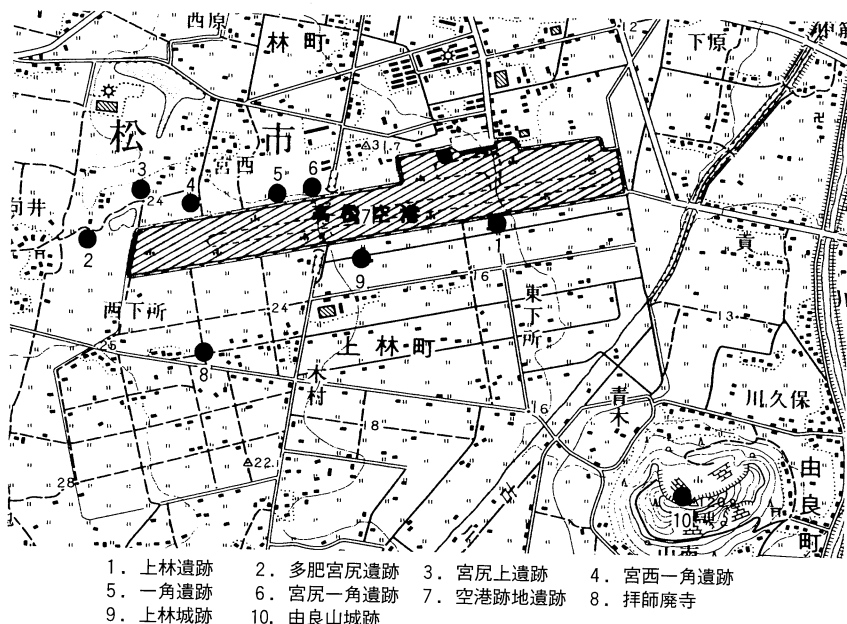
注: 斜体は検出できた部分の値を表す。

第4表 炭化材を多く含む土坑一覧表

XII. 上林遺跡

1. 立地と環境

高松平野は香東川の形成した扇状地とその海浜部の沖積低地からなる。上林遺跡はこの平野の南部中央、ほぼ扇端に位置する遺跡である。遺跡の東側には春日川の支流である古川が流れ、南方には由良山、日山があり、その山間に大小のため池が散在する。これらのため池、および扇状地の伏流水が用水源として利用されてきた。旧高松空港跡地は現在ではインテリジェ



第51図 遺跡位置図 (1/25,000)

ントパークとしての整備が進み、周辺の景観は急速にその姿を変えた。現在の標高は約10mを測る。

本遺跡の北側、空港跡地遺跡では13世紀初頭～16世紀中葉までの区画溝を伴った居館が検出されている。上林遺跡でもその外堀の延長、およびその他の付属物の解明が期待された。その他周辺の遺跡については、近隣の遺跡の既刊の報告書を参照されたい。

2. 調査の成果

当遺跡は平成2年度から9年度まで調査された空港跡地遺跡に南接し、遺構の南限を知る手掛りとなる遺跡である。ただし、既往の調査で南側の遺構密度が希薄になるということが判明しており、当初から当遺跡内の遺構密度の薄さは想定されていた。今回の調査で検出できた遺構は、掘立柱建物3棟・柵列?1条・ピット68基・溝状遺構17条・土抗3基・性格不明遺構6基・井戸1基である。掘立柱建物のうち、北側のS B01は出土遺物から中世の所産と判明したが、南側のS B02・03は遺物が出土しておらず、その所属時期については不明である。また、溝状遺構もS D01・15を除き、いずれも近世から近代にかけての遺構であることが出土遺物から想定できる。特にS D03は現行の地割の方向と合致している他、プラスチック片・ガラスといったものが出土しており、極めて新しい時期のものであることがわかる。

中 世

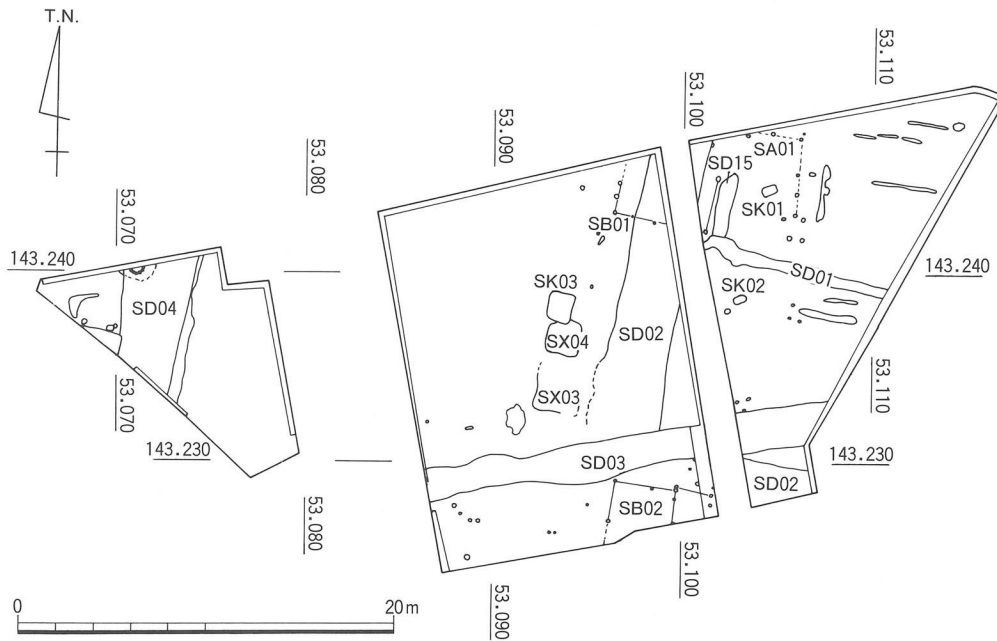
S B01 調査区北側中央付近で検出した掘立柱建物である。一部、コンクリート製の畦畔に遮られており、その詳細は不明であるものの、規模が東西5m×南北3m、2間×4間程度の建物が想定できる。柱穴の規模は概ね直径15～20cm程度、深さ25cm前後を測る。複数の柱穴から土師器小皿・瓦器碗の破片が出土しており、これらから13世紀ごろのものと想定できる。

近代

SD04 調査区西側で検出した溝状遺構である。幅約3m、深さ約1mを測る。主軸方位はN9°Eを測る。溝の中心に堆積した埋土は、昭和19年の空港建設のための造成によるものと考えられる。西岸は握り拳から人頭大の礫に覆われていたが、人為的なものかどうかは不明である。出土遺物は近世のものが大半であるが、若干中世のものも混じる他、ガラス瓶等も混入しており、概ね上記の最終埋没であることが想定できる。中世の遺物はこのSD04の前身となる坪界溝が本来存在し、それを削平した結果混入したものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査においては既往の調査で予測されたとおり、遺構の密度は低く大半が近世以降の遺構であった。ただし、今年度調査区南半分でピット群が検出できており、南側へ遺構が広がる可能性が指摘できる。来年度以降、南側へ調査予定地が伸びることから、遺跡の範囲の詳細についてはこの調査に委ねたい。



第52図 遺構平面図 (1/400)



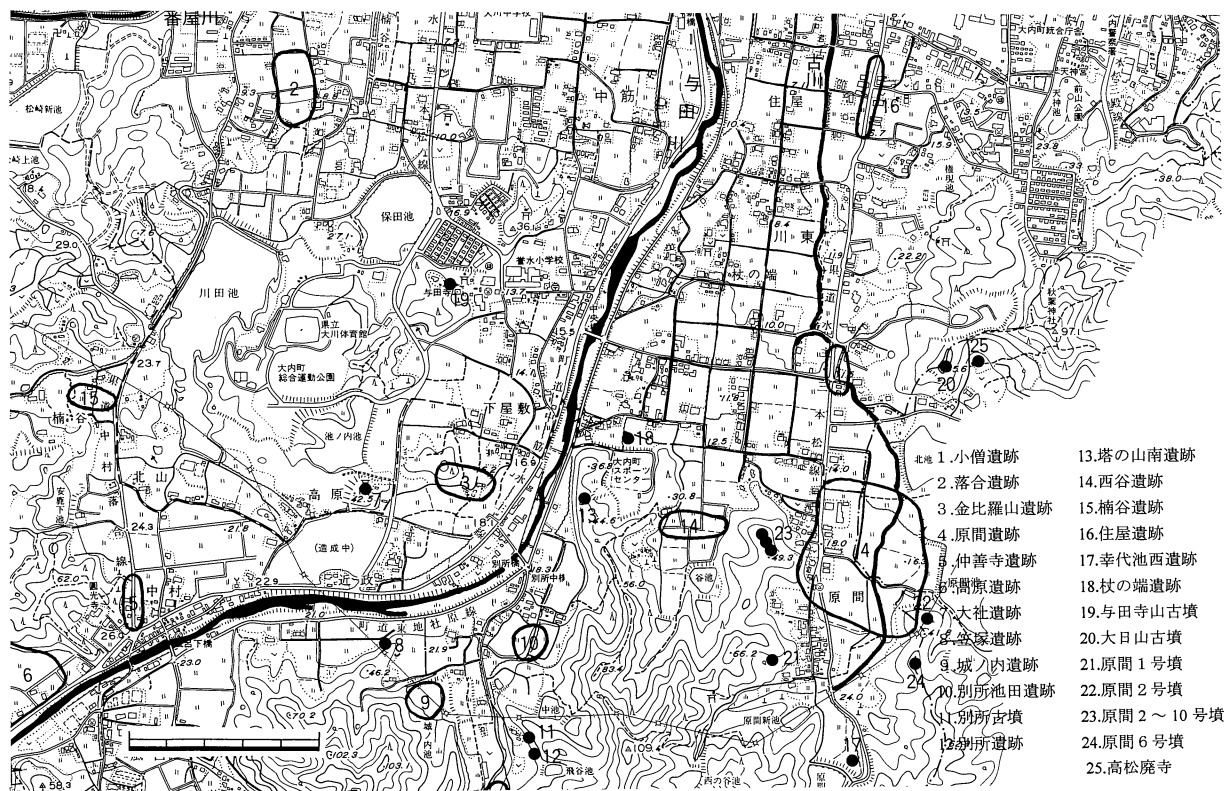
写真61 調査区全景

XIII. 小僧遺跡

1. 立地と環境

小僧遺跡は本県でも東部地方である大川郡大内町川東に位置する。この大内町は北側は瀬戸内海と発達した東西に延びる砂帯、西側を那智山、東側を秋葉山、南側を虎丸山などの阿讃山脈系の山塊によって画され、これらから蛇行しつつ瀬戸内海へ流下する与田川・古川・番屋川の小規模河川によって形成された矮小な沖積平野から構成されている。この比較的完結した地形は、集落間関係やその単位を理解する為の地域設定を容易にするという利点をもつ。本遺跡は上記河川の中でも最も東部に位置する古川中流域に位置し、近年四国横断自動車道の建設工事に伴い発掘調査が実施されている。また、この沖積平野上には真北方向から9°東偏する条里型地割の痕跡が広く確認されるが、その施工年代・継続期間を推定する手がかりは現状では乏しく、今後の発掘資料の増加を待つべきであろう。

発掘調査例の少なからず平野部での旧石器・縄文時代の遺物出土例は少ない。平成9年度の本遺跡南側の原間遺跡の調査成果には弥生時代以降のベース面となる砂層、ないしシルト層から縄文前・後期の遺物が確認された。これは沖積平野の形成年代の一端を示唆するものであるとともに、今後より広範囲での理化学的な形成年代の追求や考古学的な埋没微地形の把握が必要である。弥生時代になるとこの砂層・シルト層の堆積は一端完了するが、遺跡の分布からは平野中央部に位置するものは少なく丘陵裾部や谷部に立地する傾向があり、引き続き不安定な堆積環境下にあったことが伺える。弥生前期後葉～末には落合遺跡が出現するが、その継続期間は短く中期前葉の集落は未確認である。中葉～後葉には金比羅山遺跡や仲善寺遺跡など与田川中流域を中心として集落が確認されるが依然としてその数は少ない。後期中葉になると集落が増加する傾向にあり墓地の様相も明らかになりつつある。



第53図 周辺の遺跡

原間遺跡は最も集落内の様相が判明しているが、その内部の諸遺構の密集度は低く、幾つかの微高地に4棟程度の竪穴住居がまとまりをもって点在するもので、突出した単位集団は未だ存在していない。しかし、原間遺跡東側の丘陵部に位置する樋端遺跡の土壙墓・土器棺群を中心とした墓域から舶載内行花文懸垂鏡が確認されており、集団内部での特定個人の存在を示唆し、徐々にではあるが階層分化が進行していたことを物語る。だが、そこに確認される墓制は等質的であり未分化の状態にあったと言える。この様相については前期古墳の分布の欠落とも絡めて検討される問題であろう。

古墳時代中期以降は大日山古墳・原間6号墳をはじめ、本遺跡南側の丘陵部分を中心として首長墓系列を復元することができる。古代期には本遺跡周辺に郡衙・南海街道の存在が推定されているが、現在までにこれに関連した遺構・遺物が集中して見られる遺跡は無い。しかし、上記の首長墓系列の在り方、白鳳期創建と見られる白鳥廃寺や原間遺跡の7世紀中葉に比定される大形掘立柱建物群の評価を踏まえた上で検討されるべきであろう。

2. 調査の成果

調査面積は1,611m²で、事業地の範囲からI区とII区の調査区に分割し調査を実施した。調査期間は3ヶ月である。以下時期別に調査の概略を記す。

〈縄文期以前〉

調査区の東側には現古川が蛇行しながら北流する。検出した遺構の多くは弥生前期以降、近世にいたるまでの自然流路であり、上記河川の旧河道に相当すると思われる。これらは南方の小規模な花崗岩を基盤とした小規模な山塊を開析するもので、ベース面及び遺構埋没土は花崗岩がマサ化した砂質土から構成される。また、これらの旧河道は淡黄色粗砂からシルトを基盤とするが、安定的に水平堆積している状況では無く、ラミナ状に複数層位に分かれ堆積し、流木と考えられる自然木の出土をみる。同層位中には縄文期の所産と推定される風化の進んだサヌカイト剥片・同打製石鏃・土器細片を少量包含するが、いずれも時期決定に耐えうるものではない。本遺跡南方の平成9年度に発掘調査を実施した原間遺跡では、同層位より縄文前期～晩期に比定される土器群を確認しており、これらの時間幅の中で堆積したものと思われる。

〈弥生前期～後期〉

縄文前期から晩期にかけての淡黄色系の砂質土の堆積が完了するとともに、河川の下刻作用によって段丘化が進行する。I区では2本の自然流路(S R02下位流路A・B)を検出した。両者とも現河川に平行する形で蛇行しながら北へ流下する。埋没土は中位の粗砂層を基準にして上・下位に植物遺体を多く含む黒褐色系粘土が堆積している。下位より弥生前期後半の土器群が一定程度確認され、上位には後期後半の土器の出土を見る。

〈古代～中世期〉

I区流路A・Bが埋積されたのち、これらを覆うように調査区全域に灰色系粘質土と粗砂の交互層が厚さ0.6mほど堆積する(S R02)。出土遺物は層位別に下位より8世紀代の須恵器坏類や中位より11世紀代の黒色土器椀、上位より13世紀代の土師質土器坏などの出土を見た。この内、灰色粘質土とした上面には耕作痕跡と思われる攪拌された状況が確認できたが、面的に把握することはできなかった。この壁面観察以外は材料が乏しいが、古代(8世紀)段階から中世(13世紀)の段階にかけて、耕地利用されていたことを推定する。

〈近世以降〉

調査区全域において、上記S R02上面に層厚0.3mほどの黄橙色粗砂とシルトからなる洪水砂層が堆積する。出土遺物は17～18世紀代の染付椀などが少量含まれる。この段階には一端、耕地が放棄され更にこの上層には現在の耕作土と床土が見られ現在に至っている。



写真62 II b区 自然流路群 (北から)

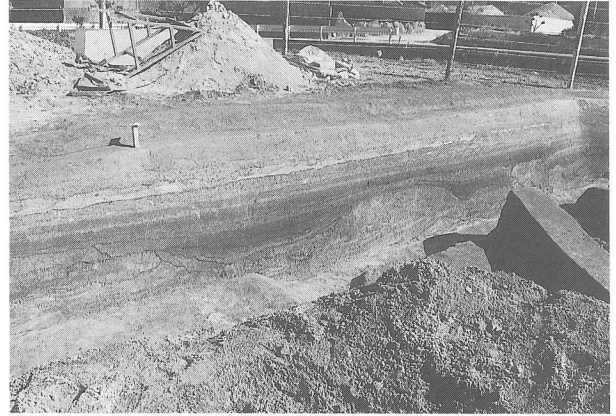


写真62 II b区 北壁土層 (南西から)



第54図 II b区 平面図

報告書抄録

ふりがな	けんどう・かせんかんけいまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいほう							
書名	県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名								
巻次	平成11年度							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名								
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 電話 (代)0877-48-2191							
発行機関名	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター							
発行年月日	西暦 2000年 3月31日							
総頁数	目次等	本文	表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数	
64 頁	6 頁	58 頁	1 頁	0 頁	63 枚	54 枚	0 枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町	遺跡					
なかひがしいせき 中東遺跡	かがわけんなかたどぐんたどつちょう 香川県仲多度郡多度津町 おくしらかたあざなかひがし 奥白方字中東	37404		34度 14分 45秒	133度 43分 23秒	19990701 ～ 19990831	848	県道多度津丸 亀線建設事業
わらまいせき 原間遺跡	かがわけんおおかわぐんおちちょう 香川県大川郡大内町 かわひがしわらま 川東原間	37303		34度 13分 51秒	134度 20分 03秒	19990401 ～ 19990531	1,009	県道大内白鳥 インター線
たひみやじり 多肥宮尻 遺跡	かがわけんたかまつしたひかみまち 香川県高松市多肥上町	37201		34度 17分 23秒	134度 03分 36秒	19990401 ～ 19990930	4,195	県道太田上町 志度線建設事業
すだなかお 須田・中尾 瀬遺跡	かがわけんみとよぐんたくまちょうたくま 香川県三豊郡詫間町詫間	76972		34度 13分 45秒	133度 39分 27秒	19990401 ～ 19991227	2,638	県道紫雲出線
おのうえいせき 尾の上遺跡	同上	同上		34度 13分 45秒	133度 39分 27秒	19990401 ～ 19990706	494	同上
ほんむらなかいせき 本村中遺跡	同上	同上		34度 13分 47秒	133度 20分 04秒	19990401 ～ 19991227	540	同上

たむらいせき 田村遺跡	かがわけんまるがめし たむらちよう 香川県丸亀市田村 町	37202		34度 16分 15秒	133度 47分 51秒	19990901 ～ 19991031	650	県道高松丸亀 線改良工事
はないけりきた 花池尻北 いせき 遺跡	かがわけんおおかわぐん し どころし ど 香川県大川郡志度町志度	37306		34度 18分 48秒	134度 10分 25秒	19991001 ～ 20000131	2,220	県道高松志度 線建設事業
かわつ ろくたん ち 川津六反地 いせき 遺跡	かがわけんさかいでし かわつちよう 香川県坂出市川津 町	37203		34度 17分 04秒	133度 51分 26秒	19991201 ～ 20000331	1,850	国道438号
おかしみずいせき 岡清水遺跡	かがわけんこうなんちよう おおあざおかあざ 香川県香南 町 大字岡字 しみず 清水	43801		34度 13分 10秒	134度 02分 15秒	19990401 ～ 19991130	5,600	国道193号
かみばやし いせき 上林遺跡	かがわけんたかまつしはやしちよう 香川県高松市林 町	37201		34度 17分 25秒	134度 04分 36秒	20000201 ～ 20000331	690	県道中徳三谷 高松線建設
こぞういせき 小僧遺跡	かがわけんおおかわぐんおお ちちよう 香川県大川郡大内 町	37303		34度 14分 10秒	134度 20分 05秒	20000101 ～ 20000033	1161	中小規模河川 古川改修事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
中東遺跡		古墳時代中期	溝状遺構	円筒埴輪		方墳周溝の可能 性が高い		
		鎌倉時代	塚・溝状遺構・柱穴 土坑・自然河川	須恵器・土師器 陶磁器				
原間遺跡		弥生時代後期	竪穴住居・掘立柱建 物・溝・柱穴・土坑	弥生土器 ガラス玉・石製品				
		古墳時代後期	土坑墓	須恵器・土師器				
多肥宮尻遺 跡	自然河川 跡	弥生時代中期	自然河川跡	弥生土器・磨製石 斧・打製石鏃・石包 丁・木製農具		土器溜まりは祭 祀遺構か		
		古墳時代後期	自然河川跡 土器溜まり	須恵器・土師器 滑石製玉				
須田・中尾 瀬, 尾の上, 本村中遺跡	集落跡・ 自然河川 跡	縄文時代後期	堅果類出土土坑 自然河川跡	縄文土器・打製石 鏃・打製石匙・打製 石斧・磨製石斧柄				
	鎌倉時代	柱穴跡・溝状遺 構	土師器・輸入磁器・ 備前焼・土錘・銅銭					
	自然河川 跡	江戸時代	自然河川跡	縄文土器・弥生土 器・打製石鏃・打製 石匙・輸入磁器・備 前焼				
	自然流路 跡	中世	溝状遺構	角錐状石器・縄文土 器・打製石鏃・土師 器				

田村遺跡		奈良～平安時代	梵鐘鑄造土坑・溝状遺構・土坑・掘立柱建物・柱穴	須恵器・土師器・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・梵鐘鑄型・溶解炉片・銅滓・銅滴	調査地は寺域内の一角に相当すると思われる
花池尻北遺跡	集落跡	平安～近世	掘立柱建物跡・溝状遺構・柱穴・土坑	須恵器・土師器 鉄滓・火打石	
川津六反地遺跡	集落跡	弥生時代	溝状遺構	弥生土器・石器	
		中世	溝状遺構	土師器・須恵器 瓦器・磁器・瓦	
岡清水遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居・土坑・土器棺墓・井戸跡・溝状遺構	弥生土器・石器	
		中世～近世	掘立柱建物跡・土坑	土師器・須恵器	
上林遺跡	集落跡	中世～近世	掘立柱建物跡 溝状遺構	土師器・瓦器	
小僧遺跡	自然流路群	弥生時代前期	自然流路群	弥生土器	
		古墳時代前期	自然流路群	土師器	
		平安時代	自然流路群 溝状遺構	須恵器・土師器	

県道・河川関係埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

平成12年 3月31日

編集・発行 香川県埋蔵文化財研究会
香川県坂出市府中町南谷5001番地 4
電話 (0877) 48-2191
FAX (0877) 48-3249
印刷 セキ株式会社